

夏目漱石

琴のそら音



琴のそら音

「珍らしいね、久しく来なかつたじやないか」と津田君が出過ぎた洋燈ランプの穂を細めながら尋ねた。

津田君がこう云つた時、余ははち切れて膝頭ひざがしらの出そ
うなズボンの上で、相馬焼そうまやきの茶碗の糸底を三本指でぐる
ぐる廻しながら考えた。成程珍らしいに相違ない、この
正月に顔を合せたぎり、花盛りの今日まで津田君の下宿
を訪問した事はない。

「来きよう来きようと思ひながら、つい忙がしいものだか

ら——」

「そりあ、忙がしいだろう、何と云つても学校に居たうちとは違うからね、この頃でもやはり午後六時までかい」
「まあ大概その位さ、家へ帰つて飯を食うとそれなり寝てしまう。勉強どころか湯にも碌々ろくろく這入はいらない位だ」と
余は茶碗を畳の上へ置いて、卒業が恨めしいと云う顔をして見せる。

津田君はこの一言いちごんに少々同情の念を起したと見えて
「成程少し瘠やせた様だぜ、余程苦しいのだらう」と云う。気のせいか当人は学士になってから少々肥った様に

見えるのが癩しやくに障さわる。机の上に何だか面白そうな本を広げて右の頁ページの上に鉛筆で註が入れてある。こんな閑ひまがあるかと思うと羨うらやましくもあり、忌々しくもあり、同時に吾身が恨めしくなる。

「君は不相あいかわらず変勉強で結構だ、その読みかけてある本は何かね。ノートなどを入れて大分叮嚀ていねいに調べているじやないか」

「これか、なにこれは幽霊の本さ」と津田君は頗すこぶる平気な顔をしている。この忙しい世の中に、流行はやりもせぬ幽霊の書物を澄まして愛読するなどというのは、呑気を

通り越して贅沢ぜいたくの沙汰さただと思ふ。

「僕も気楽に幽霊でも研究してみたいが、——どうも毎日芝から小石川の奥まで帰るのだから研究は愚か、自分が幽霊になりそうな位さ、考えると心細くなつてしまふ」

「そうだったね、つい忘れていた。どうだい新世帯の味は。一戸を構えると自おのずから主人らしい心持がするかね」と津田君は幽霊を研究するだけあつて心理作用に立ち入つた質問をする。

「あんまり主人らしい心持もしないさ。やツぱり下宿せいとんの方が気楽でいい様だ。あれでも万事整頓せいとんしていたら旦那だんな

の心持と云う特別な心持になれるかも知れんが、何しろ真鍮しんちゆうの薬罐やかんで湯を沸かしたり、ブリツキの金盥かなだらいで顔を洗つてる内は主人らしくないからな」と實際のところを白状する。

「それでも主人さ。これが俺のうちだと思えば何となく愉快だろう。所有と云う事と愛惜という事は大抵の場合に於おいて伴おなうのが原則だから」と津田君は心理学的に人の心を説明してくれる。学者と云うものは頼みもせぬ事を一々説明してくゐる者である。

「俺の家うちだと思えばどうか知らんが、てんで俺の家だと

思いたくないんだからね。そりや名前だけは主人に違いないさ。だから門口にも僕の名刺だけは張り付けて置いたがね。七円五十銭の家賃の主人なんざあ、主人にしたところが見事な主人じゃない。主人中の属官なるものだあね。主人になるなら勅任主人か少なくとも奏任主人にならなくっちゃ愉快はないさ。只下宿の時分より面倒が殖えるばかりだ」と深くも考えずに浮気の不平だけを發表して相手の気色けしきを窺うかがう。向うが少しでも同意したら、すぐ不平の後陣を繰り出す積りである。

「成程真理はその辺にあるかも知れん。下宿を続けて

いる僕と、新たに一戸を構えた君とは自から立脚地が違
うからな」と言語は頗るむずかしいがとにかく余の説
に賛成だけはしてくれ。この模様ならもう少し不平を
陳列しても差し支はない。

「先ずうちへ帰ると婆さんが横綴じの帳面を持って僕の
前へ出てくる。今日は御味噌を三錢、大根を二本、鶉豆
を一錢五厘買いましたと精密なる報告をするんだね。厄
介極まるのさ」

「厄介極まるなら廃せばいいじゃないか」と津田君は下
宿人だけあって無雑作な事を言う。

「僕は廃してもいいが婆さんが承知しないから困る。そんな事は一々聞かないでもいいから好加減いにしてくれと云うと、どう致しまして、奥様のいらっしやらない御家うちで、御台所を預かっております以上は一銭一厘でも間違いがあってはなりません、てって頑がんとして主人の云う事を聞かないんだからね」

「それじゃあ、只ただうんうん云って聞いてる振をしていりや宜よかろう」津田君は外部の刺激の如何いにかん関せず心は自由ゆに働うき得ると考くえているらしい。心理学者にも似合あしからぬ事だ。

「然ししかそれだけじやないのだからな。精細なる会計報告が済むと、今度は翌日あすの御菜おかずに就ついて綿密なる指揮を仰ぐのだから弱る」

「見計らって調理こしらえろと云えば好いじやないか」

「ところが当人見計らうだけに、御菜めいりに関して明瞭ようなる観念がないのだから仕方がない」

「それじや君が云い付けるさ。御菜めいりのプログラム位訳ないじやないか」

「それが容易たやすく出来る位なら苦にやならないさ。僕だつて御菜上の智識は頗る乏しいやね。明日あしたの御みおつけの

実は何に致しましてようとかくると、最初から即答は出来ない男なんだから……」

「何だい御みおつけと云うのは」

「味噌汁の事さ。東京の婆さんだから、東京流に御みおつけと云うのだ。先ずその汁の実を何に致しましてようと思われると、実になり得べき者を秩序正しく並べた上で選択をしなければならんだろう。一々考え出すのが第一の困難で、考え出した品物に就て取捨をするのが第二の困難だ」

「そんな困難をして飯を食ってるのは情ない訳だ、君が

特別に数奇すきなものがないから困難なんだよ。二個以上の物体を同等の程度で好悪こうおするときには決断力の上に遅鈍な影響を与えるのが原則だ」と又分り切った事を態々わざわざむずかしくしてしまふ。

「味噌汁の実まで相談するかと思うと、妙な所へ干渉するよ」

「へえ、やはり食物上にかね」

「うん、毎朝梅干に白砂糖を懸けて来て是非一つ食えつて云うんだがね。これを食わないと婆さん頗る御機嫌が悪いのさ」

「食えばどうかするのかい」

「何でも厄病除よけのまじないだそうだ。そうして婆さんの理由が面白い。日本中どこの宿屋へ泊っても朝、梅干を出さない所はない。まじないが利かなければ、こんなに一般の習慣となる訳がないと云って得意に梅干を食わせるんだからな」

「成程それは一理あるよ、凡すべての習慣は皆相応の功力があるので維持せらるるのだから、梅干だって一概に馬鹿には出来ないさ」

「なんて君まで婆さんの肩を持った日にや、僕は愈いよいよ主

人らしからざる心持に成ってしまわあ」と飲みさしの巻烟草たばこを火鉢の灰の中へ擲たき込む。燃え残りのマッチの散る中に、白いものがさと動いて斜めに一の字が出来る。

「とにかく旧弊な婆さんだな」

「旧弊はとくに卒業して迷信婆ばばあ々々さ。何でも月に二三返は伝通院でんずういん辺の何とか云う坊主の所へ相談に行く様子だ」

「親類に坊主でもあるのかい」

「なに坊主が小遣こづかい取りに占いをやるんだがね。その坊主が又余計な事ばかり云うもんだから始末に行かないのさ。現に僕が家を持つ時なども鬼門だとか八方塞ふさがりだ

とか云つて大おおに弱おいらしたもんだ」

「だって家を持ってからその婆さんを雇つたんだらう」

「雇つたのは引き越す時だが約束は前からして置いたのだからね。実はあの婆々も四谷の宇野の世話で、これなら大丈夫だひと独りで留守をさせても心配はないと母が云うから極めた訳さ」

「それなら君の未来の妻君の御母おつかさんの御眼鏡で人にんせん撰せんに預つた婆さんだから慥たしかかなもんだらう」

「人間は慥かに相違ないが迷信には驚いた。何でも引き越すと云う三日前に例の坊主の所へ行つて見て貰つたん

だそうだ。すると坊主が今本郷から小石川の方へ向いて動くのは甚はなはだよくない、きつと家内かないに不幸があると云ったんだがね。——余計な事じゃないか、何も坊主の癖にそんな知った風な妄言もうごんを吐かんでもの事だあね」

「然しかしそれが商売だから仕様がなない」

「商売なら勘弁してやるから、金だけ貰って当り障りのない事を喋舌しゃべるがいいや」

「そう怒っても僕の咎とがじゃないんだから埒らちはあかんよ」

「その上若い女に祟たたると御負けを附加つけしたんだ。さあ婆さん驚くまい事か、僕のうちに若い女があるとすれば近

い内貰う筈の宇野の娘に相違ないと自分で見解を下してくだ独りひとで心配しているのさ」

「だって、まだ君の所へは来んのだろう」

「来んうちから心配をするから取越苦労さ」

「何だか洒落しやれか真面目まじめか分らなくなつて来たぜ」

「まるで御話にも何もなりやしない。ところで近頃僕の家の近辺で野良犬が遠吠とおぼえをやり出したんだ。……」

「犬の遠吠と婆さんとは何か関係があるのかい。僕には聯想れんそうさえ浮ばんが」と津田君は如何いかに得意の心理学でもこれは説明が出来にく悪いと一寸眉ちよつとを寄せる。余はわざと落

ち付き払って御茶を一杯と云う。相馬焼の茶碗は安くて俗な者である。もとは貧乏士族が内職に焼いたとさえ伝聞している。津田君が三十匁めの出殻でがらを浪々なみなみこの安茶碗についでくれた時余は何となく厭いやな心持がして飲む気がしなくなつた。茶碗の底を見ると狩野法眼かのうほうげん元信流もとのぶの馬が勢よく跳ねている。安いに似合わず活潑な馬だと感心はしたが、馬に感心したからと云つて飲みたくない茶を飲む義理もあるまいと思つて茶碗は手に取らなかつた。

「さあ飲み給え」と津田君が促がす。

「この馬は中々勢がいい。あの尻尾しっぽを振つて鬣たてがみを乱し

ているところは野馬のんまだね」と茶を飲まない代りに馬を賞ほめてやった。

「冗談じゃない、婆さんが急に犬になるかと、思うと、犬が急に馬になるのは烈しい。それからどうしたんだ」と頻しきりに後あとを聞きたがる。茶は飲まんでも差し支えない事となる。

「婆さんが云うには、あの鳴き声は唯の鳴き声ではない、何でもこの辺に変があるに相違ないから用心しないではいかんと云うのさ。然し用心をしろと云ったって別段用心の仕様もないから打ち遣やって置くから構わない

が、うるさいには閉口だ」

「そんなに鳴き立てるのかい」

「なに犬はうるさくも何ともないさ。第一僕はぐうぐう寐ねてしまうから、いつどんなに吠えるのか全く知らん位さ。然し婆さんの訴えは僕の起きている時えらを忖えらんで来るから面倒だね」

「成程如何に婆さんでも君の寐ている時をよって御氣を御付け遊せとも云うまい」

「ところへもって来て僕の未来の細君が風邪を引いたんだね。丁度婆さんの御お誂あつらえ通に事件が輻輳ふくそうしたからたま

らない」

「それでも宇野の御嬢さんはまだ四谷にいるんだから心配せんでも宜さそうなものだ」

「それを心配するから迷信婆々さ、あなたが御移りにならないと御嬢様の御病気がはやく御全快になりませんか。是非この月中に方角のいい所へ御転宅遊ばせと云う訳さ。飛んだ預言者に捕つらまって、大迷惑だ」

「移るのもいいかも知れんよ」

「馬鹿あ言つてら、この間越したばかりだね。そんなに度々引越たびたびしをしたら身代限しんだいかぎりをするばかりだ」

「然し病人は大丈夫かい」

「君まで妙な事を言うぜ。少々伝通院の坊主にかぶれて来たんじゃないか。そんなに人を威嚇おどかすもんじゃない」

「威嚇かすんじゃない、大丈夫かと聞くんだ。これでも君の妻君の身の上を心配した積りなんだよ」

「大丈夫に極きまってるさ。咳嗽せきは少し出るがインフルエンザなんだもの」

「インフルエンザ？」と津田君は突然余を驚かす程な大きな声を出す。今度は本当に威嚇かされて、無言のまま津田君の顔を見詰める。

「よく注意し給え」と二句目は低い声で云った。初めの大きな声に反してこの低い声が耳の底をつき抜けて頭の中へしんと浸み込んだ様な気持がする。何故なぜだか分らない。細い針は根まで這はい入る、低くても透とおる声は骨に答えるのである。碧瑠璃へきるりの大空に瞳程ひとみな黒き点をはたと打たれた様な心持ちである。消えて失せるか、溶けて流れるか、武庫山むこやま卸おろししにならぬとも限らぬ。この瞳程な点の運命はこれから津田君の説明で決せられるのである。余は覚えぬ相馬焼の茶碗を取り上げて冷たき茶を一時にぐつと飲み干した。

「注意せんといかんよ」と津田君は再び同じ事を同じ調子で繰り返す。瞳程な点が一段の黒味を増す。然し流れるとも広がるとも片付かぬ。

「縁喜えんぎでもない、いやに人を驚かせるぜ。ワハハハハハ」と無理に大きな声で笑って見せたが、腑ふの抜けた勢のないう声が無意味に響くので、我ながら気が付いて途中でびたりと已やめた。やめると同時にこの笑が愈不自然に聞かれたのでやはり仕舞まで笑い切れれば善かったと思う。津田君はこの笑を何と聞きいたかしらん。再び口を開いた時は依然として以前の調子である。

「いや実はこう云う話がある。ついこの間の事だが、僕の親戚の者がやはりインフルエンザに罹^{かか}ってね。別段の事はないと思って好加減にして置いたら、一週間目から肺炎に變じて、とうとう一箇月立たない内に死んでしまった。その時医者の話さ。この頃のインフルエンザは性^{たち}が悪い、じきに肺炎になるから用心をせんといかんと云ったが——実に夢の様さ。可哀^{かわい}そうでね」と言い掛けて厭^{いや}な寒い顔をする。

「へえ、それは飛んだ事だった。どうして又肺炎などに變じたのだ」と心配だから参考の為め聞いて置く気にな

る。

「どうしてって、別段の事情もないのだが——それだから君のも注意せんといかんと云うのさ」

「本当だね」と余は満腹の真面目をこの四文字に籠こめて、津田君の眼の中を熱心に覗のぞき込んだ。津田君はまだ寒い顔をしている。

「いやだいやだ、考えてもいやだ。二十二や三で死んでは実につまらんからね。しかも所おっと天は戦争に行ってるんだから——」

「ふん、女か？ そりや気の毒だなあ。軍人だね」

「うん所天は陸軍中尉さ。結婚してまだ一年にならんさ。僕は通夜つやにも行き葬式の供にも立ったが——その夫人の御母おつかさんが泣いてね——」

「泣くだろう、誰だって泣かあ」

「丁度葬式の当日は雪がちらちら降って寒い日だったが、御経が済んで愈棺かんを埋うめると、御母さんが穴の傍そばへしやがんだぎり動かない。雪が飛んで頭の上が斑まだらになるから、僕が蝙蝠傘こうもりをさし懸けてやった」

「それは感心だ、君にも似合わない優しい事をしたものだ」

「だって気の毒で見えていられないもの」

「そうだろう」と余は又法眼元信の馬を見る。自分ながらこの時は相手の寒い顔が伝染しているに相違ないと思つた。咄嗟とっさの間に死んだ女の所天の事が聞いてみたくなる。

「それでその所天の方は無事なのかね」

「所天は黒木軍に附いているんだが、この方はまあ幸さいわいに怪我もしない様だ」

「細君が死んだと云う報知を受取つたらさぞ驚いたろう」

「いや、それに付いて不思議な話があるんだがね、日本から手紙の届かない先に細君がちゃんと亭主の所へ行っているんだ」

「行ってるとは？」

「逢いに行ってるんだ」

「どうして？」

「どうしてって、逢いに行つたのさ」

「逢いに行くにも何にも当人死んでるんじゃないか」

「死んで逢いに行つたのさ」

「馬鹿あ云ってら、いくら亭主が恋しいって、そん

な芸が誰に出来るもんか。まるで林屋正三の怪談だ」

「いや実際行つたんだから、仕様がな」と津田君は教育ある人にも似合ず、頑固がんこに愚ぐな事を主張する。

「仕様がな——何だか見て来た様な事を云うぜ。可笑おかしいな、君本当にそんな事を話してるのかい」

「無論本当さ」

「こりや驚いた。まるで僕のうちの婆さんの様だ」

「婆さんでも爺じいさんでも事実だから仕方がない」と津

田君は愈いよいよ躍起になる。どうも余にからかっている様にも見えない。はてな真面目で云っているとすれば何か曰いわ

くのある事だろう。津田君と余は大学へ入ってから科は違^{ちが}うたが、高等学校では同じ組に居た事もある。その時余は大概四十何人の席末を汚すのが例であつたのに、先生は巋^き然^{ぜん}として常に二三番を下らなかつたところを以^{もつ}て見ると、頭脳は余よりも三十五六枚方明^{めい}晰^{せき}に相違ない。その津田君が躍起になるまで弁護するのだから満更の出^で鱈^{たら}目^めではあるまい。余は法学士である、刻下の事件を有のままに見て常識で捌^{さば}いて行くより外に思慮^{しよ}を廻^{めぐ}らすのは能^{あた}わざるよりも寧^{むし}ろ好まざるところである。幽霊だ、崇^ただ^{たり}、因^{いん}縁^{えん}だなどと雲を攫^{つか}む様な事を考えるのは一番

嫌きらである。が津田君の頭脳には少々恐れ入っている。その恐れ入ってる先生が真面目に幽霊談をするとすると、余もこの問題に対する態度を義理にも改めたくなくなる。実を云うと幽霊と雲助は維新以来永久廃業した者とのみ信じていたのである。然しかるに先刻さつきから津田君の容子ようすを見ると、何だかこの幽霊なる者が余の知らぬ間に再興された様にもある。先刻机の上にある書物は何かと尋ねた時にも幽霊の書物だとか答えたと言憶する。とにかく損はない事だ。忙がしい余に取ってはこんな機会は又とあるまい。後学の為め話だけでも拝聴して帰ろうと漸く肚はらの

中で決心した。見ると津田君も話の続きが話したいと云う風である。話したい、聞きたいと事が極きまれば訳はない。漢水は依然として西南に流れるのが千古の法則だ。

「段々聞き糺ただしてみると、その妻と云うのが夫の出征前に誓ったのだそうだ」

「何を？」

「もし万一御留守中に病気で死ぬ様な事がありましたも
只は死にませんって」

「へえ」

「必ず魂魄こんぱくだけは御傍おそばへ行つて、もう一遍御目に懸りま

すと云った時に、亭主は軍人で磊落らいらくな気性だから笑いながら、よろしい、何時いつでも来なさい、戦さの見物をさしてやるからと云ったぎり満洲へ渡ったんだがね。その後そんな事はまるで忘れてしまつて一向気にも掛けなかつたそうだ」

「そうだろう、僕なんざ軍いくさに出なくつても忘れてしまわあ」

「それでその男が出立をする時細君が色々手伝つて手荷物などを買ってやった中に、懐中持の小さい鏡があつたそうだ」

「ふん。君は大変詳しく調べているな」

「なにあとで戦地から手紙が来たのでその顛末てんまつが明瞭になつた訳だが。——その鏡を先生常に懐中していてね」

「うん」

「ある朝例の如くそれを取り出して何心なく見たんだそうだ。するとその鏡の奥に写つたのが——いつもの通り髭ひげだらけな垢染あかじみた顔だろうと思うと——不思議だねえ——実に妙な事があるじゃないか」

「どうしたい」

「青白い細君の病気に窶やつれた姿がスーとあらわれたと云

うんだがね——いえそれは一寸信じられんのさ、誰に聞かしても嘘うそだろうと云うさ。現に僕などもその手紙を見るまでは信じない一人であつたのさ。然し向うで手紙を出したのは無論こちらから死去の通知の行つた三週間も前なんだぜ。嘘をつくつたつて嘘にする材料のない時ださ。それにそんな嘘をつく必要がないだろうじやないか。死ぬか生きるかと云う戦争中にこんな小説染じみた呑気な法ほ螺らを書いて国元へ送るものは一人もない訳ださ」

「そりや無い」と云つたが実はまだ半信半疑である。半信半疑ではあるが何だか物凄ものすごい、気味の悪い、一言にし

て云うと法学士に似合わしからざる感じが起こった。

「尤^{もつと}も話しはしなかつたそうだ。黙って鏡の裏^{うち}から夫

の顔をしけしけ見詰めたぎりだそうだが、その時夫の胸の中に訣別^{けつべつ}の時、細君の言った言葉が渦の様に忽然^{こつぜん}と湧^わいて出たと云うんだが、こりやそうだろう。焼^{やき}小手^{こて}で脳味噌をじゅつと焚^やかれた様な心持だと手紙に書いてあるよ」

「妙な事があるものだな」手紙の文句まで引用されると是非とも信じなければならぬ様になる。何となく物騒な気合^{けはい}である。この時津田君がもしワツとでも叫んだら余

はきつと飛び上ったに相違ない。

「それで時間を調べてみると細君が息を引き取ったのと夫が鏡を眺めたのが同日同刻になっている」

「愈不思議だな」この時に至っては真面目に不思議と思
い出した。「然しそんな事が有り得る事かな」と念の為
め津田君に聞いてみる。

「ここにもそんな事を書いた本があるがね」と津田君は
先刻の書物を机の上から取り卸しながら「近頃じゃ、有
り得ると云う事だけは証明されそうだよ」と落ち付き払
って答える。法学士の知らぬ間に心理学者の方では幽霊

を再興しているなと思うと幽霊も愈馬鹿に出来なくなる。知らぬ事には口が出せぬ、知らぬは無能力である。幽霊に関しては法学士は文学士に盲従しなければならぬと思う。

「遠い距離に於て、ある人の脳の細胞さいほうと、他の人の細胞が感じて一種の化学的変化を起すと……」

「僕は法学士だから、そんな事を聞いても分らん。要するにそう云う事は理論上あり得るんだね」余の如き頭脳不透明なるものは理窟りくつを承るより結論だけ呑み込んで置く方が簡便である。

「ああ、つまりそこへ帰着するのさ。それにこの本にも例が沢山あるがね、その内でロード・ブローアムの見た幽霊などは今の話しとまるで同じ場合に属するものだ。中々面白い。君ブローアムは知っているだろう」

「ブローアム？ ブローアムたなんだい」

「英国の文学者さ」

「道理で知らんと思った。僕は自慢じゃないが文学者の名なんかシェクスピアとミルトンとその外に二三人しか知らんのだ」

津田君はこんな人間と学問上の議論をするのは無駄だ

と思つたか「それだから宇野の御嬢さんもよく注意したまいと云う事さ」と話を元へ戻す。

「うん注意はさせるよ。然し万一の事がありましたらきつと御目に懸りに上りますなんて誓は立てないのだからその方は大丈夫だろう」と洒落しゃれてみたが心うちの中は何となく不愉快であつた。時計を出して見ると十一時に近い。これは大変。うちではさぞ婆さんが犬の遠吠を苦にしているだろうと思うと、一刻も早く歸りたくなる。「いずれその内婆さんに近付になりに行くよ」と云う津田君に「御馳走をするから是非来給え」と云いながら白山御殿はくさん

町の下宿を出る。

我からと惜気もなく咲いた彼岸桜ひがんざくらに、愈春が来たな
と浮かれ出したのも僅わずか二三日にさんちの間である。今では桜自
身さえ早待ったと後悔しているだろう。生温なまぬるく帽を吹く
風に、額際ひたいぎわから煮染にじみ出す膏あぶらと、粘り着く砂埃すなほこりとを
一所ぬぐに拭い去った一昨日おとといの事を思うと、まるで去年の様
な心持ちがする。それ程きのうから寒くなつた。今夜は
一層である。冴返さえるなどと云う時節でもないに馬鹿々々
しいと外套がいとうの襟えりを立てて盲啞もうあ学校の前から植物園の横を
だらだらと下りた時、どこで撞つく鐘だか夜の中に波を描

いて、静かな空をうねりながら来る。十一時だなと思う。

——時の鐘は誰が発明したものか知らん。今までは気が付かなかつたが注意して聴いてみると妙な響である。一つ音が粘り強い餅もちを引き千切ちぎった様に幾つにも割れてくる。割れたから縁が絶えたかと思うと細くなって、次の音に繋つながる。繋がつて太くなつたかと思うと、又筆の穂の様に自然と細くなる。——あの音はいやに伸びたり縮んだりするなと考えながら歩ある行くと、自分の心臓の鼓動も鐘の波のうねりと共に伸びたり縮んだりする様に感ぜられる。仕舞しまいには鐘の音にわが呼吸を合せたくなる。今

夜はどうしても法学士らしくないと、足早に交番の角を曲るとき、冷たい風に誘われてポツリと大粒の雨が顔にあたる。

極楽水はいやに陰気な所である。近頃は両側へ長家が建ったので昔程淋さみしくはないが、その長家が左右共げきぜん闐然として空家の様に見えるのは余り気持のいいものではない。貧民に活動はつき物である。働いておらぬ貧民は、貧民たる本性を遺失して生きたものとは認められぬ。余が通り抜ける極楽水ごくらくみずの貧民は打てども蘇よみ返る景色なきまでに静かである。——實際死んでいるのだらう。ポツ

リポツリと雨は漸く濃こまかになる。傘を持って来なかつた、殊によると帰るまでには**ずぶ濡ぬれ**になるわいと舌打をしながら空を仰ぐ。雨は闇やみの底から**蕭々しょうしょう**と降る、容易に晴れそうにもない。

五六間先に**忽たちま**ち白い者が見える。往来の真中まんなかに立ち留つて、首を延してこの白い者をすかしているうちに、白い者は容赦もなく余の方へ進んでくる。半分はんぶんと立たぬ間に余の右側を掠かすめる如く過ぎ去つたのを見ると——蜜み柑箱かんの様なものに白い巾きれをかけて、黒い着物をきた男が二人、棒を通して前後から担いで行くのである。大方葬

式か焼場であろう。箱の中のは乳飲子に違いない。黒い男は互に言葉も交まじえずに黙ってこの棺桶かんおけを担いで行く。天下に夜中棺桶を担になう程、当然の出来事はあるまいと、思い切った調子でコツコツ担いで行く。闇に消える棺桶を暫くは物珍らし気に見送って振り返った時、又行手から人声が聞え出した。高い声でもない、低い声でもない、夜が更けているので存外反響が烈しい。

「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」と一人が云うと「寿命だよ、全く寿命だから仕方がない」と一人が答える。二人の黒い影が又余の傍そばを掠かすめて見る間に闇の中へもぐ

り込む。棺の後を追って足早に刻むきぎゆ下駄の音のみが雨に響く。

「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」と余は胸の中うちで繰り返してみた。昨日生れて今日死ぬ者さえあるなら、昨日病気に罹しかって今日死ぬ者は固よりあるべき筈である。二十六年も娑婆しやばの気を吸ったものは病気に罹しからんでも充分死ぬ資格を具もえている。こうやって極楽水を四月三日の夜の十一時に上のぼりつつあるのは、ことによると死にに上のぼってるのかも知れない。——何だか上りたくない。暫らく坂の途中で立ってみる。然し立っているのは、殊ことによ

ると死にに立っているのかも知れない。——又歩ある行き出す。死ぬと云う事がこれ程人の心を動かすとは今までつ
い気が付かなんだ。気が付いてみると立っても歩行いて
も心配になる、この様子では家へ帰って蒲ふとん団の中へ這はい入
ってもやはり心配になるかも知れぬ。何故今までは平気
で暮していたのであろう。考えてみると学校に居た時分
は試験とベースボールで死ぬと云う事を考える暇がなか
った。卒業してからはペンとインキとそれから月給の足
らないのと婆さんの苦情でやはり死ぬと云う事を考える
暇がなかった。人間は死ぬ者だとは如何に呑気な余でも

承知しておつたに相違ないが、實際余も死ぬものだと感じたのは今夜が生れて以来始めてである。夜と云う無暗に大きな黒い者が、歩行いても立っても上下四方から閉じ込めていて、その中に余と云う形体を溶かし込まぬと承知せぬぞと逼るせま様に感ぜらるる。余は元來吞気なだけに正直なところ、功名心には冷淡な男である。死ぬとしても別に思い置く事はない。別に思い置く事はないが死ぬのは非常に厭だいや、どうしても死にたくない。死ぬのはこれ程いやな者かなと始めて覚った様に思う。雨は段段密になるので外套がいとうが水を含んで触ると、濡れた海綿を圧

す様にじくじくする。

竹早町^{たけはやちよう}を横ぎって切支丹坂^{きりしたんざか}へかかる。何故切支丹坂

と云うのか分らないが、この坂も名前に劣らぬ怪しい坂である。坂の上へ来た時、ふと先達^{せんだつ}てここを通って「日

本一急な坂、命の欲しい者は用心じゃ用心じゃ」と書いた張札が土手の横からはすに往来へ差し出ているのを滑^{こつ}稽^{けい}だと笑った事を思い出す。今夜は笑うどころではない。

命の欲しい者は用心じゃと云う文句が聖書にでもある格言の様に胸に浮ぶ。坂道は暗い。減多に下りると滑^{すべ}って尻餅^{しりもち}を搗^つく。陰吞^{けんのん}だと八合目あたりから下を見て覘^{ねらい}を

つける。暗くて何もよく見えぬ。左の上手からふるえのき古榎が
 無遠慮に枝を突き出して日の目の通わぬ程に坂をおお蔽うて
 いるから、昼でもこの坂を下りる時は谷の底へ落ちると
 同様あまり善い心持ではない。榎は見えるかなと顔を上
 げて見ると、有ると思えばあり、無いと思えば無い程な
 黒い者に雨の注ぐ音がしき頻りにする。この暗闇まっくらな坂を下り
 て、細い谷道を伝って、茗荷谷みょうがたにを向へ上って七八丁行
 けば小日向台町こびなただいまちの余が家へ帰られるのだが、向へ上がる
 までがちと気味がわるい。

茗荷谷の坂の中途に当る位な所に赤いあざや鮮かな火が見

える。前から見えていたのか顔をあげる途端に見えだしたのか判然しないが、とにかく雨を透すかしてよく見える。或あるいは屋敷の門口に立ててある瓦斯ガス燈ではないかと思つて見ていると、その火がゆらりゆらりと盆燈籠ぼんどうろうの秋風に揺られる具合に動いた。——瓦斯燈ではない。何だろうと見ていると今度はその火が雨と闇の中を波の様に縫つて上から下へ動いて来る。——これは提ちようちん灯の火に相違ないと漸く判断した時それが不意と消えてしまう。この火を見た時、余ははつと露子の事を思い出した。露子は余が未来の細君の名である。未来の細君とこの火

とどんな関係があるかは心理学者の津田君にも説明は出来んかも知れぬ。然し心理学者の説明し得るものでなく、ては思い出してならぬとも限るまい。この赤い、鮮かな、

尾の消える縄に似た火は余をして慥たしかに余が未来の細君を咄とつ嗟さの際に思い出さしめたのである。——同時に火の消えた瞬間が露子の死を未練もなく拈ねん出しゅつした。額を撫なでると膏汗あぶらあせと雨でずるずるする。余は夢中であるく。

坂を下り切ると細い谷道で、その谷道が尽きたと思うあたりから又向き直つて西へ西へと爪上りつまあがに新しい谷道がつづく。この辺は所謂山いわゆるの手の赤土で、少しでも雨が

降ると下駄の齒を吸い落す程に溼ぬかる。暗さは暗し、靴はかかと踵を深く上に据え付けて容易たやすくは動かぬ。曲りくねつて無暗矢鱈やたらに行くくと枸杞垣くこがきとも覚おぼしきものの鋭どく折れ曲る角でぱたりと又赤い火に出喰でくわした。見ると巡査である。巡査はその赤い火を焼くまでに余の頬に押し当てて「悪るいから御気を付けなさい」と言い棄てて擦すれ違ちがった。よく注意し給えと云った津田君の言葉と、悪いから御気をつけなさいと教えた巡査の言葉とは似ているなと思うと忽ち胸が鉛の様ように重くなる。あの火だ、あの火だと余は息を切らして馳かけ上る。

どこをどう歩行いたとも知らず流星の如く吾家へ飛び込んだのは十二時近くであろう。三分心の薄暗いランプを片手に奥から駆け出して来た婆さんが頓とんきよう狂な声を張り上げて「旦那様！ どうなさいました」と云う。見ると婆さんは蒼あおい顔をしている。

「婆さん！ どうかしたか」と余も大きな声を出す。婆さんも余から何か聞くのが怖しく、余は婆さんから何か聞くのが怖しいので御互にどうかしたかと問い掛けながら、その返答は両方とも云わずに双方とも暫時にら睨み合っている。

「水が——水が垂れます」これは婆さんの注意である。成程充分に雨を含んだ外套の裾すそと、中折帽の庇ひさしから用捨なく冷たい点滴が畳の上じょうに垂れる。折目をつまんで抛ほうり出すと、婆さんの膝ひざの傍そばに白繻子しろじゆすの裏を天井へ向けて帽が転がる。灰色のチェスターフィールドを脱いで、一振り振って投げた時はいつもより余程重く感じた。日本服ふくに着換えて、身顫ふるいをして漸くわれに帰った頃を見計って婆さんは又「どうなさいました」と尋ねる。今度は先方も少しは落付おちいている。

「どうするって、別段どうもせんさ。只雨に濡れただけ

の事さ」となるべく弱身を見せまいとする。

「いえあの御顔色は只の御色では御座いません」と伝通院の坊主を信仰するだけあって、うまく人相を見る。

「御前の方がどうかしたんだろう。先ツきは少し齒の根が合わない様だったぜ」

「私は何と旦那様から冷かされても構いません。——然し旦那様じょうだんごと雑談事じゃ御座いませんよ」

「え？」と思わず心臓が縮みあがる。「どうした。留守中何かあったのか。四谷から病人の事でも何か云って来たのか」

「それ御覧遊ばせ、そんなに御嬢様の事を心配していらつしやる癖に」

「何と云って来た。手紙が来たのか、使が来たのか」

「手紙も使も参りは致しません」

「それじゃ電報か」

「電報なんて参りは致しません」

「それじゃ、どうした——早く聞かせろ」

「今夜は鳴き方が違いますよ」

「何が？」

「何がって、あなた、どうも宵から心配で堪りたまませんで

した。どうしても只事じゃ御座いません」

「何がさ。それだから早く聞かせろと云ってるじゃないか」

「先達せんだつて中から申し上げた犬で御座います」

「犬？」

「ええ、遠吠で御座います。私が申し上げた通りに遊ばせば、こんな事には成らないで済んだんで御座いますのに、あなたが婆さんの迷信だなんて、余あんまり人を馬鹿に遊ばすものですから……」

「こんな事にもあんな事にも、まだ何にも起らないじ

やないか」

「いえ、そうでは御座いません、旦那様も御歸り遊ばす途中御嬢様の御病気の事を考えていらしつたに相違御座いません」と婆さんずばと凶星を刺す。寒い刃が闇に閃ひらめいてひやりと胸打を喰むねうちわせられた様な心持がする。

「それは心配して来たに相違ないさ」

「それ御覽遊ばせ、やっぱり虫が知らせるので御座います」

「婆さん虫が知らせるなんて事が本当にあるものかな、御前そんな経験をした事があるのかい」

「有る段じや御座いません。昔しから人がからすな烏鳴きが悪いとか何とか善く申すじや御座いませんか」

「成程烏鳴きは聞いた様だが、犬の遠吠は御前一人の様だが——」

「いいえ、あなた」と婆さんは大けいべつ軽蔑の口調で余の疑を否定する。「同じ事で御座いますよ。婆やなどは犬の遠吠でよく分ります。論より証拠これは何かあるなと思つと外はずれた事が御座いませんもの」

「そうかい」

「年寄の云う事は馬鹿に出来ません」

「そりや無論馬鹿には出来んさ。馬鹿に出来んのは僕もよく知っているさ。だから何も御前を——然し遠吠がそんなに、よく当るものかな」

「まだ婆やの申す事を疑うたぐつていらつしやる。何でも宜しゅう御座いますから明朝四谷みょうあさへ行つて御覽遊ばせ、

きつと何か御座いますよ、婆やが受合いますから」

「きつと何か有つちや厭だな。どうか工夫はあるまいか」
「それだから早く御越し遊ばせと申し上げるのに、あなたが余り剛情を御張り遊ばすものだから——」

「これから剛情はやめるよ。——ともかくあした早く四

谷へ行ってみる事に仕よう。今夜これから行っても好いが……」

「今夜いらしつちや、婆やは御留守居は出来ません」
「なぜ？」

「なぜって、気味きびが悪くって居ても起ってもいられませんか」

「それでも御前が四谷の事を心配しているんじゃないか」

「心配は致しておりますが、私だって怖しゅう御座いますから」

折から軒を遶る雨の響に和して、いづくよりともなく何物か地を這うて唸り廻る様な声が聞える。

「ああ、あれで御座います」と婆さんが瞳を据え小声で云う。成程陰気な声である。今夜はここへ寝る事にきめる。

余は例の如く蒲団の中へもぐり込んだがこの唸り声が気になって瞼さえ合わせることが出来ない。

普通犬の鳴き声というものは、後も先も鉈刀で打ち切った薪雑木を長く継いだ直線的の声である。今聞く唸り声はそんなに簡単な無造作の者ではない。声の幅に絶え

ざる変化があつて、曲りが見えて、丸みを帯びている。
 蠟燭ろうそくの灯の細きより始まつて次第に福やかに広がつて又
 油の尽きた燈心の花と漸次に消えて行く。どこで吠える
 か分らぬ。百里の遠き外ほかから、吹く風に乗せられて微かすか
 に響くと思ふ間に、近づけば軒端を洩れて、枕に塞ふさぐ耳
 にも薄せまる。ウウウウと云う音が丸い段落をいくつも連つらね
 て家の周囲を二三度繞ると、いつしかその音がワワワワ
 に変化する拍子、疾とき風に吹き除のけられて遙か向うに尻しつ
 尾ほはンンンと化して闇の世界に入る。陽気な声を無理に
 圧迫して陰鬱にしたのがこの遠吠である。躁狂そつきやうな響を

権柄けんぺいづくで沈痛ならしめているのがこの遠吠である。自由でない。压制されて已やむを得ずに出す声であるところが本来の陰鬱、天然の沈痛よりも一層厭である、聞き苦しい。余は夜着よぎの中に耳の根まで隠した。夜着の中でも聞える、しかも耳を出しているより一層聞き苦しい。又顔を出す。

暫らくすると遠吠がはたと已む。この夜半の世界から犬の遠吠を引き去ると動いているものは一つもない。吾家が海の底へ沈んだと思う位静かになる。静まらぬは吾心のみである。吾心のみはこの静かな中から何事かを予

期しつつある。去れどもその何事なるかは寸分の観念だにない。性の知れぬ者がこの闇の世から一寸顔を出しはせまいかという掛念けねんが猛烈に神経を鼓舞するのみである。今出るか、今出るかと考えている。髪の毛の間へ五本の指を差し込んで無茶苦茶に搔かいてみる。一週間程湯に入って頭を洗わなので指の股またが油でニチャニチャする。この静かな世界が変化したら——どうも変化しそうだ。今夜のうち、夜の明けぬうち何かあるに相違ない。この一秒も待って過ごす。この一秒もまた待ちつつ暮らす。何を待っているかと云われては困る。何を待ってい

るか自分に分らんから一層の苦痛である。頭から抜き取った手を顔の前に出して無意味に眺める。爪の裏が垢で薄黒く三日月形に見える。同時に胃囊いぶくろが運動を停止して、雨に逢った鹿皮を天日で乾し堅めた様に腹の中が窮窟になる。犬が吠えれば善いと思う。吠えているうちは厭でも、厭な度合が分る。こう静かになつては、どんな厭な事が背後に起りつつあるのか、知らぬ間に釀かもされつつあるか見当がつかぬ。遠吠なら我慢する。どうか吠えてくれればいと寝返りを打って仰向けになる。天井に丸くランプの影が幽かすかに写る。見るとその丸い影が動い

ている様だ。愈不思議になつて来たと思つと、浦団の上で脊髓せきずいが急にぐにやりとする。只眼だけを見張つて、慥たしかに動いておるか、おらぬかを確める。——確かに動いている。平常ふだんから動いているのだが気が付かずに今日まで過したのか、又は今夜に限つて動くのかしらん。——もし今夜だけ動くのなら、只事ではない。然しあるい或はたは腹工合のせいかも知れまい。今日会社の帰りに池の端の西洋料理屋で海老えびのフライを食つたが、ことによるとあれが崇たたっているかもしれない。つまらん物を食つて、錢をとられて馬鹿々々しい廃よせばよかつた。何しろこんな時は氣

を落ち付けて寝るのが肝心だと堅く眼を閉じてみる。すると虹霓にじを粉にして振り蒔く様に、眼の前が五色の斑点ほんてんでちらちらする。これは駄目だと眼を開くと又ランプの影が気になる。仕方がないから又横向になつて大病人の如く、凝じつとして夜の明けるのを待とうと決心した。

横を向いて不図目いに入ったのは、襖ふすまの陰に婆さんが叮嚀ていねいに畳んで置いた秩父銘仙ちちぶの不断着である。この前四谷に行つて露子の枕元で例の通り他愛たわいもない話をしておつた時、病人が袖口の綻ほころびから綿が出懸つてゐるのを気にして、よせと云うのを無理に蒲団の上へ起き直つて

縫ってくれた事をすぐ聯想^{れんそう}する。あの時は顔色が少し悪
いばかりで笑い声さえ常とは変らなかつたのに——当人
ももう大分好くなつたから明日^{あした}あたりから床を上げまし
ようとさえ言つたのに——今、眼の前に露子の姿を浮べ
て見ると——浮べて見るのではない、自然に浮んで来る
のだが——頭へ氷囊^{ひょうのう}を載せて、長い髪を半分濡らして、
うんうん呻^{うめ}きながら、枕の上へのり出してくる。——愈^{いよいよ}
肺炎かしらと思う。然し肺炎にでもなつたら何とか知ら
せが来る筈だ。使も手紙も来ないところを以て見るとや
っぱり病気は全快したに相違ない、大丈夫だ、と断定し

て眠ろうとする。合わす瞳の底に露子の青白い肉の落ちた頬と、窪くぼんで硝子張ガラス張りの様に凄すごい眼がありありと写る。どうも病氣は癒なおっておらぬらしい。しらせは未いまだ来ぬが、来ぬと云う事が安心にはならん。今に来るかも知れん、どうせ来るなら早く来れば好い、来ないか知らんと寝返りを打つ。寒いとは云え四月と云う時節に、厚夜着を二枚も重ねて掛けているから、只でさえ寝苦しい程暑い訳であるが、手足と胸の中は全く血の通わぬ様に重く冷たい。手で身のうちを撫なでてみると膏あぶらと汗で湿っている。皮膚の上に冷たい指が触るのが、青大将にでも這われる

様に厭な気持である。ことによると今夜のうちに使でも来るかも知れん。

突然何者か表の雨戸を破れる程叩く。そら来たど心臓が飛び上って肋あばらの四枚目を蹴ける。何か云う様だが叩く音と共に耳を襲うので、よく聞き取れぬ。「婆さん、何か来たぜ」と云う声の下から「旦那様、何か参りました」と答える。余と婆さんは同時に表口へ出て雨戸を開ける。——巡査が赤い火を持って立っている。

「今しがた何かありはしませんか」と巡査は不審な顔をして、挨拶もせぬ先から突然尋ねる。余と婆さんは云い

合した様に顔を見合わせる。両方共何とも答をしない。

「実は今ここを巡行するとね、何だか黒い影が御門から出て行きましたから……」

婆さんの顔は土の様である。何か云おうとするが息がはずんで云えない。巡査は余の方を見て返答を促がす。

余は化石の如く茫然ぼうぜんと立っている。

「いやこれは夜中やちゆうはなは甚だ失礼で……実は近頃この界限かいわいが

非常に物騒なので、警察でも非常に嚴重に警戒をします
ので——丁度御門が開いておって、何か出て行った様な
按排あんばいでしたから、もしやと思つて一寸御注意をしたので

すが……」

余は漸くほっと息をつく。咽喉のどに痞つかえている鉛たまの丸が下りた様な気持ちができる。

「これは御親切に、どうも、——いえ別に何も盗難かに罹かった覚はない様です」

「それなら宜しゅう御座います。毎晩犬が吠えて御やかましいでしょう。どう云うものか賊がこの辺はいかいばかり徘徊はいかいしますんで」

「どうも御苦勞様」と景氣よく答えたのは遠吠が泥棒の為めであるとも解釈が出来るからである。巡査は帰る。

余は夜が明け次第四谷に行く積りで、六時が鳴るまでまんじりともせず待ち明した。

雨は漸く上ったが道は非常に悪い。足駄をと云うと齒入屋へ持って行ったぎり、つい取ってくるのを忘れたと云う。靴は昨夜の雨で到底穿けそうにない。構うものかと薩摩下駄を引掛けて全速力で四谷坂町まで馳けつける。門は開いているが玄関はまだ戸閉りがしてある。書生はまだ起きんのかしらと勝手口へ廻る。清と云う下総生れの頬ペタの赤い下女が俎の上で糠味噌から出し立ての細根大根を切っている。「御早よう、何はどうだ」

と聞くと驚いた顔をして、たすき襷を半分外はずしながら「へえ」と云う。へえでは埒らちがあかん。構わず飛び上って、茶の間へつかつか這入り込む。見ると御母おつかさんが、今起き立の顔をして叮嚀ていねいに如鱗木じょりんもくの長火鉢を拭いている。

「あら靖雄やすおさん！」と布巾ふきんを持ったままあっけに取られたと云う風をする。あら靖雄さんでも埒があかん。

「どうです、余程悪いですか」と口早に聞く。

犬の遠吠が泥棒のせいと極まる位なら、ことによると病気も癒っているかも知れない。癒っていてくれれば宜いがと御母さんの顔を見て息を呑み込む。

「ええ悪いでしょう、昨日は大變降りしましたからね。さぞ御困りでしたろう」これでは少々見当が違ふ。御母さんの様子を見ると何だか驚いている様だが、別に心配そ
うにも見えない。余は何となく落ち付いて来る。

「中々悪い道です」とハンケチを出して汗を拭いたが、やはり氣掛りだから「あの露子さんは——」と聞いてみた。

「今顔を洗っています、昨夜中央会堂の慈善音楽会とか
に行つて遅く歸つたものですから、つい寝坊をしまして
ね」

「インフルエンザは？」

「ええ有難うありがと、もうさっぱり……」

「何ともないんですか」

「ええ風邪はとつくに癒りました」

寒からぬ春風に、濛々もうもうたる小雨こさめの吹き払われて蒼空あおぞらの

底まで見える心地である。日本一の御機嫌そろにて候と云う

文句がどこかに書いてあつた様だが、こんな気分を云う

のではないかと、昨夕の気味の悪かったのに引き換えて

今の胸の中が一層朗かになる。なぜあんな事を苦にした

ろう、自分ながら愚の至りだと悟ってみると、何だか

馬鹿々々しい。馬鹿々々しいと思うにつけて、たとい親しい間柄とは云え、用もないのに早朝から人の家へ飛び込んだのが手持無沙汰に感ぜらるる。

「どうして、こんな早く、——何か用事でも出来たんですか」と御母さんが真面目に聞く。どう答えて宜いか分らん。嘘をつくと言ったって、そう咄嗟とっさの際に嘘がうまく出るものではない。余は仕方がないから「ええ」と云った。

「ええ」と云った後で、廃よせば善かった、——一思いに正直な所を白状してしまえば善かったと、すぐ気が付い

たが、「ええ」の出たあとにはもう仕方がない。「ええ」を引き込める訳に行かなければ「ええ」を活かさなければならん。「ええ」とは単簡たんかんな二文字もんじであるが滅多に使うものでない、これを活かすには余程骨が折れる。

「何か急な御用なんですか」と御母さんは詰め寄せる。別段の名案も浮ばないから又「ええ」と答えて置いて、「露子さん露子さん」と風呂場の方を向いて大きな声で怒鳴ってみた。

「あら、どなたかと思つたら、御早いのねえ——どうなすつたの、——何か御用なの？」露子は人の気も知らず

に又同じ質問で苦しめる。

「ああ何か急に御用が御出来なすったんだって」と御母さんは露子に代理の返事をする。

「そう、何の御用なの」と露子は無邪気に聞く。

「ええ、少しその、用があつて近所まで来たのですから」と漸く一方に活路を開く。随分苦しい開き方だとい人で肚はらの中で考える。

「それでは、私に御用じゃないの」と御母さんは少々不審な顔付である。

「ええ」

「もう用を済ましていらしたの、随分早いのね」と露子は大に感嘆する。

「いえ、まだこれから行くんです」とあまり感嘆されても困るから、一寸謙遜けんそんしてみたが、どっちにしても別に変りはないと思うと、自分で自分の言っている事が如何いかにも馬鹿らしく聞える。こんな時はなるべく早く帰る方が得策だ、長座ながざをすればする程失敗するばかりだと、そろそろ、尻を立てかけると

「あなた、顔の色が大変悪い様ですがどうかなさりやしませんか」と御母さんが逆捻さかねじを喰わせる。

「髪を御刈りになると好いのね、あんまり鬚ひげが生えているから病人らしいのよ。あら頭にはねが上っててよ。大変乱暴に御歩おある行きなすったのね」

「日ひ和より下げ駄たですもの、余程上ったでしょう」と脊中せなかを向いて見せる。御母さんと露子は同時に「おやまあ！」と申し合せた様な驚き方をする。

羽織を干して貰って、足駄を借りて奥に寝ている御父っさんには挨拶もしないで門を出る。うららかな上天気で、しかも日曜である。少々ばつは悪かった様なもの。昨夜ゆうべの心配は紅炉こうろ上じょうの雪と消えて、余が前途には柳、

桜の春が簇がるばかり嬉しい。神楽坂かぐらざかまで来て床屋へ這入る。未来の細君の歡心を得んが為だと云われても構わない。實際余は何事によらず露子の好く様にしたいと思つている。

「旦那髯は残しましょうか」と白服を着た職人が聞く。髯そを剃るといいと露子が云つたのだが全体の髯あごの事か髯ひげだけかわからない。まあ鼻の下だけは残す事にしようと一人で極める。職人が残しましょうかと思を押し位だから、残したって余り目立つ程のものでもないには極つている。

「源さん、世の中にや随分馬鹿な奴がいるもんだねえ」
 と余の顚をつまんでかみそり髮剃を逆に持ちながら一寸火鉢の方
 を見る。

源さんは火鉢の傍に陣取ってしょうぎばん将碁盤の上で金銀二枚
 をしきりにパチつかせていたが「本当にさ、幽霊だの亡者もうじや
 だのって、そりや御前、昔しの事だあな。電気燈のつく
 今日こんにちそんなべらぼう籠棒な話しがある訳がねえからな」と王様の
 肩へ飛車を載せてみる。「おいよしこうおめえ由公御前あたたかずしこうやって駒を
 十枚積んで見ねえか、積めたら安宅おご鮓おごを十銭奢おごってやる
 ぜ」

一本歯の高足駄を穿いた下剃したぞりの小僧が「鮎じやいやだ、幽霊を見せてくれたら、積んで見せらあ」と洗濯したてのタウエルを畳みながら笑っている。

「幽霊も由公にまで馬鹿にされる位だから幅は利かない訳さね」と余の揉もみ上げを米噛こめぬかみのあたりからぞきりと切り落とす。

「あんまり短かかあないか」

「近頃はみんなこの位です。揉み上げの長いのはにやけてて可笑おかしいもんです。——なあに、みんな神経さ。自分の心に恐いと思うから自然幽霊だって増長して出たく

ならあね」と刃についた毛を人さし指と拇指おやゆびで拭いながら又源さんに話しかける。

「全く神経だ」と源さんが山桜の烟けむりを口から吹き出しながら賛成する。

「神経って者は源さんどこにあるんだろう」と由公はランプのホヤを拭きながら真面目に質問する。

「神経か、神経は御めえ方々にあらあな」と源さんの答弁は少々漠然としている。

白暖簾しろのれんの懸った座敷の入口に腰を掛けて、先つきから手垢のついた薄っぺらな本を見ていた松さんが急に大き

な声を出して面白い事がかいてあらあ、よっほど面白いと一人で笑い出す。

「何だい小説か、食道楽じゃねえか」と源さんが聞くと松さんはそうよそうかも知れねえと上表紙を見る。標題には浮世心理講義録有耶無耶道人著とかいてある。

「何だか長い名だ、とにかく食道楽じゃねえ。鎌さん一体これや何の本だい」と余の耳に髪剃を入れてぐるぐる廻転させている職人に聞く。

「何だか、訳の分らない様な、とぼけた事が書いてある本だがね」

「一人で笑っていねえで少し読んで聞かせねえ」と源さんは松さんに請求する。松さんは大きな声で一節を読み上げる。

「狸たぬきが人を婆化ばかすと云いやすけれど、何で狸が婆化しやしよう。ありやみんな催眠術でげす……」

「成程妙な本だね」と源さんは烟けむに捲まかれている。

「拙せつが一返古榎いへんふるえのきになった事がありやす、ところへ源兵衛げんべえ村の作蔵と云う若い衆しゅが首を縊くりに来やした……」

「何だい狸が何か云ってるのか」

「どうもそうらしいね」

「それじゃ狸のこせえた本じゃねえか——人を馬鹿にしやがる——それから？」

「拙が腕をニューと出しているところへ古禪ふるふんどしを懸けやした——随分臭くそうげしたよ——……」

「狸の癖こいたごにいやに贅沢そくそくを云うぜ」

「肥桶こいたごを台にしてぶらりと下がる途端拙はわざと腕をぐにやりと卸ろしてやりやしたので作蔵君は首を縊そくなり損そくなつてまごまごしておりやす。ここだと思いやしたから急に榎の姿を隠してアハハハハと源兵衛村中へ響く程な大きな声で笑ってやりやした。すると作蔵君は余程仰天し

たと見えやして助けてくれ、助けてくれと禪を置去りにして一生懸命に逃げ出しやした……」

「こいつあ旨え、うめ然し狸が作蔵の禪をとって何にするだろう」

「大方きんたま宰丸でもつつむ気だろう」

アハハハハと皆みんな一度に笑う。余も吹き出しそうになつたので職人は一寸髮剃を顔からはずす。

「面白え、おもしろあとを読みねえ」と源さん大おおに乗気になる。

「俗人は拙が作蔵を婆化した様に云う奴でげすが、そりやちと無理でげしよう。作蔵君は婆化されよう、婆化さ

れようとして源兵衛村をのそのそしているのでげす。その婆化されようと云う作蔵君の御注文に応じて拙が一寸婆化して上げたまでの事ではげす。すべて狸たぬき一派のやり口は今日こんにち開業医の用いておりやす催眠術でげして、昔からこの手で大分たいほう大方の諸君子を胡魔化ごまかしたものでげす。西洋の狸から直伝じきでんに輸入致した術あがを催眠法とか唱え、これを応用する連中を先生などと崇めるのは全く西洋心酔の結果で拙などはひそかに慨嘆の至に堪えん位のものでげす。何も日本固有の奇術が現に伝っているのに、一も西洋二も西洋と騒がんでもの事ではげしよう。今の日本人

はちと狸を軽蔑し過ぎる様に思われやすから一寸全国の狸共に代って拙から諸君に反省を希望して置きやしよう」

「いやに理窟を云う狸だぜ」と源さんが云うと、松さんは本を伏せて「全く狸の言う通りだよ、昔だって今だって、こっちがしっかりしていりや婆化されるなんて事はねえんだからな」と頻りに狸の議論を弁護している。そして見ると昨夜は全く狸に致された訳かなと、一人で愛想をつかしながら床屋を出る。

台町の吾家に着いたのは十時頃であつたらう。門前に

黒塗の車が待っていて、狭い格子こうしの隙すから女の笑い声が洩れる。ベルを鳴らして沓脱に這入る途端「きつと帰っていらっしやっただよ」と云う声がして障子がすうと明くと、露子が温かい春の様な顔をして余を迎える。

「あなた来ていたのですか」

「ええ、御帰りになってから、考えたら何だか様子が変わったから、すぐ車で来て見たの、そうして、昨夕の事を、みんな婆やから聞いてよ」と婆さんを見て笑い崩れくずる。婆さんも嬉しそうに笑う。露子の銀の様な笑い声と、婆さんの真鍮しんちゆうの様な笑い声と、余の銅の様な笑い声が

調和して天下の春を七円五十銭の借家に集めた程陽気である。如何いかに源兵衛村の狸でもこの位大きな声は出せまいと思う位である。

気のせいかさその後露子は以前よりも一層余を愛する様な素振に見えた。津田君に逢った時、当夜の景況を残りなく話したらそれはいい材料だ僕の著書中に入れさせてくれると云った。文学士津田真方まかた著幽霊論の七二頁にK君の例として載っているのは余の事である。

日本文学電子図書館

倫敦塔・幻影の盾

著 者：夏目漱石

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館